



ルー
テル

藤が丘だより

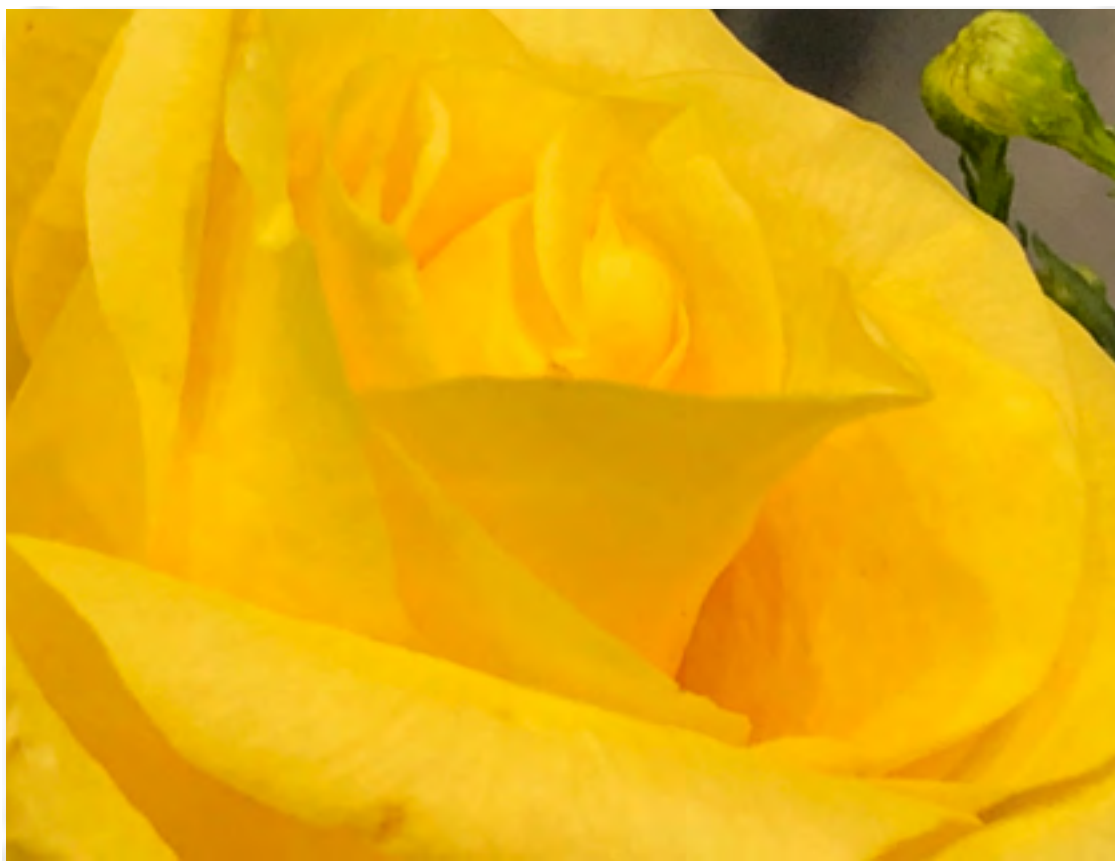
発行 月報委員会

発行日 2020年10月4日

№. 77

あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、
行わせておられるのは神であるからです。

フィリピの信徒への手紙 2章13節



礼拝献花より

御言葉に生きる

御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。

申命記30章14節

ルーター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp



シリーズ説教

『思い直しつつ』』

牧師 佐藤和宏

マタイ21章23節〜32節

今日与えられた福音の日課は、小見出しによりますと、「権威について」とあります。「権威」について考えてみたいと思います。「権威」と訳されているギリシャ語に注目しますと、それは「起源、根拠」を意味する言葉と「存在する」という意味を持つ言葉からなった、合成語であることがわかります。つまり、「権威」と訳されているギリシャ語が意味しているのは「存在する」「起源、根拠」。何によって存在しているかということなのです。

が原文によると、おおよそ次のようになっているというのです。兄は『いやです』と答えた。だが、後で考え直して出かけた。弟は『承知しました』と答えた。そして、出かけなかった。このことについて、カトリック教会の兩宮神父は、次のように書いています。「最初の息子には『だが』が使われ、二番目の息子には『そして』が使われた理由は、決して従順ではありえない人間の現実を踏まえているからだ。」「二番目の息子が『承知しました』と答えたとき、悪意があつて、故意に嘘をついたのではない。自分の本性を見落としているから、結果的に嘘をついたことになる。もちろん、彼ひとりがそうだというのではない。人間はすべてそういうものである。」

「自分の本性を見落としている。」人間はすべてそういうものである」と言われています。私たちは自らの意思によつては、神の意に添えない存在であるということです。パウロが次のように言っている通りです。「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうとい

う意志はありますが、それを実行できないからです。(ローマ7章18節)」「もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです(同7章20節)。」

私たちは、「ぶどう園に行つて働きなさい」と言われる神の御心に対して、「承知しました」と答えたとしても、実際それは「実行できない」存在でしかありません。これこそ私たちの本性にほかならないのです。パウロはそれを「罪のゆえ」としています。しかしそれでも、主なる神はそのような「わたしたちのうちに働いて、御心のままに望ませ、行わせる」と言われているのです。

私たち自身は、神の思いを知ることがも実行することもできない罪人ではないのですが、そのような私たちを深く憐れまれる神は、「御心のままに望ませ、行わせる」のです。その私たちに絶えず働きかけ、私たちの罪の赦しのために、御子イエス・キリストに十字架の死を遂げさせられたのでした。このキリストのゆえに、神に従い得ない私たちがそれで

も、「だが、思い直し」て生きるのです。この神の憐れみと愛に基づいた働きかけこそが、私たちの存在する根拠にほかならないのです。つまり、私たちの存在根拠は、ただ神にあるということなのです。もし、それが私たち自身にあるとするならば、私たちは何が出来るか、何を持つて立っているかなどなど、問われ、私たちは絶えずそれらを獲得していかなければならないでしょう。しかし、聖書が教えていることは、私たちの存在根拠は、ただ神にあるということなのです。ですから、たとえ罪人に過ぎず、神の御心に沿うことができない存在であっても、私たちはこの神の憐れみ、赦しにあつて、堂々と生きることが出来るのです。

礼拝の場を集められ、御言葉と聖霊の交わりを通して、私たちが罪人に過ぎない自身を「だが」と思い直し、私たちがそれでも主イエス・キリストの十字架によつて赦された者とされた存在根拠を「だが」と思い直し、主にあつて今日も、新たに生き始めることができるのです。

(聖霊降臨後第17主日)

新型コロナ禍の家籠り中に与えられた御言葉

①今や、恵みの時、今こそ、救いの日。コリントの信徒への手紙ニ6章2節

新型コロナ・ウイルス感染拡大でパンデミック宣言、緊急事態宣言、外出自粛と公的宣言発出で日本中いや世界中が地域籠もり、家籠もり、状態が今まで普通になされていたことが出来なくなりました。私も人生最後の7つの奉仕活動が全面中止になり出来なくなりました。社会福祉協議会、連合自治会、高齢者施設ボランティア、小学校奉仕、独居者宅支援、高齢者交流活動(サロン、麻雀、囲碁将棋、講話会、困り事対応)等々が3密を避け、フィジカル・ディスタンスの確保ですべての会場が閉館となり活動一切が出来なくなりました。したがって、私も地域籠もり、家籠もりとなり落ち込んでいました。そんな時前述の言葉に目がとまりました。先も、姿も見えない新型コロナ・ウイルスによって社会が混乱している時「今は恵みの時」と言われても響いてきません。

ウイルスの中の時では流れ世の

中は新しいやりかた、仕組みで少しずつかわり始めてきています。ステイホームが必要としての方々や子供達に会うことは出来ていませんが、リモートや文章、作品交換で交流を深めようと考えています。出来ないことを不幸と深刻にとらえるのではなく前向きに真剣に工夫と知恵を出すことは恵みではないでしょうか。私は新型コロナ・ウイルス収束までの自粛中貴重な時間として聖書

御言葉に生きる

2

私の愛唱聖句



名〇匡〇
／〇田〇郎

の学びと祈りの時にしたいと考えています。

②あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。エフエツの信徒への手紙5章8節

今までは要求されたり、気がついたらすぐに行動に移してボランティアをしていましたが、これからは3

密を避けフィジカル・ディスタンスを保ちボランティアをすることが必要ではと思っています。そのことは、高齢者や子供達の自立心、挑戦心を引き出すことに大切なことかも知れません。

ウイルスコロナの日々はいつまで続くかわかりませんが、兄弟姉妹の皆様方も感染しないように十分に気をお付けくださって、全員礼拝が可能になるまでお元気にお過ごしください。今は恵みの時にして、光の子らしく日々主に在って歩みましょう。

(名〇)

.....

主は羊飼いの、わたしには何も欠けることがない。死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。

詩編23編1節、4節前半

聖句を一つだけ選ぶとすれば迷いから抜け出せなくなってしまうのですが、次の機会もあるかと気楽に考え、今回はまず「私の聖句その一」です。この1節と4節の間には「主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返ら

せてくださる」という、忘れたいほどに限りなく美しい言葉があった。私が主という羊飼いのもとで本当の羊になったようにさえ感じさせます。それがこの前後の聖句を印象深くさせているのでしょう。

私がジャカルタに駐在していた最後の頃、ちょうど二年ほど前、突然の経営危機に瀕しました。巨大国営企業からの記録的な受注に沸いていた矢先に、協業先二社から強欲で理不尽な裏切りを受け、立ち行かなくなったのでした。迫りくる納期、膠着した仕事、懸念される巨額の賠償金、見通しの甘さを指摘するだけで支援する手立てもなく気力も薄そうなる本国やアジア各国各社との確執、生活がかかっている現地従業員とその家族たち、資金調達の厳しさ、打開策を考案できない自分の不甲斐なさ。すべてが絶望的でした。

それまでは、街中に拡声されるイスラム教徒の祈りに歩調を合わせ、早朝の祈りをするだけの「脱力系キリスト教徒」だと自認していた私でした。延々と続いた眠れない夜、ふと、祈りを多くの兄弟姉妹と共にできるネット礼拝に参加したくなった

のでした。今でもフェイスブックは苦手なので、同時中継に参加できるまで四苦八苦した記憶があります。が、それ以来毎週欠かさずの礼拝参加は、私にとって驚くべき支えとなりました。主の恵みに鈍感で自分の不遇をいつも嘆きがちだった私が、毎週の礼拝をとおして次第に、恵みが降り注いでいることを実感するようになったのです。その喜びを伝えたくて、ライブ中に説教をパソコンで要約し、終了後すぐにラインで日本の家族に知らせることが週課にさえなったのです。

絶えず祈って暮らしたあの数か月間、主日にネット礼拝で力を得、平日にはこの聖句を復唱しながら生き、暗闇の中に恐れず突っ込む勇気を新たにしました。主の恵みは深く、徐々に味方が現われ、問題が一つ一つ解決に向かい、最後には最高の業績を残すことになりました。感動の幕切れでした。今では風化しつつある出来事です。振り返れば私の人生に起きた数々の奇蹟の一つにすぎないのですが、私は決して忘れることがないでしょう。

でも、これは私の人生のなかで美

今月の受洗記念日の皆さん

- 11日 清〇〇兄、藤か〇ね姉
- 13日 〇飼由〇子姉、〇林和〇兄
- 24日 清〇〇子姉
- 25日 〇田〇一郎兄
- 27日 〇崎ま〇か姉 28日 〇村〇樹兄
- 29日 〇山〇兄、〇山〇子姉

おめでとうございます。



教会の動向



談に過ぎる一例ですので、最後に「落ち」を一つ。いまでも時折、主の恵みが少し欠けているのではと感じて自分の不遇を嘆き、だからこそ真剣に祈る私。一方で、主の恵みが実は

深く「わたしには何も欠けることがない」のだと省みる私。残念ながら、その矛盾とせめぎあい、私の信仰の今の現実なのです。(〇田)

新型コロナウイルス感染拡大の中、皆さまには不安を感じておられることでしょう。教会でも感染拡大防止のために、礼拝を3月29日より休止し、6月14日より再開いたしました。第一段階(全体を3つの地域グループに分け、それぞれ3週に一度ずつ礼拝に集う)として段階的な再開を目指したものの、その後感染拡大の勢いは衰えを見せず、10月現在、第二段階(全体を2つのグループに分け、交互に集う)に移行することができていません。9月定例役員会では、「当面継続」を確認しました。そんな中、9月より聖研を再開いたしました。半年ぶりに再開された学びは、喜びに満たされた経験となりました。16日には、久しぶりの方々を含め、恵まれた時間が与えられました。また、コロナ禍にあっ

て、インターネットを利用しての学びの時間を持っています。3月に転入された〇藤真〇さんと9月16日付で転入された定〇〇子さんと、個別に学んでいます。

現在、3週に一度の限定された礼拝ですが、その経験はいつの間にか当たり前に思われて来たことが、恵まれたことであつたと、私たちに教えているようです。また、礼拝では式文を歌わずに唱えています。その経験は、私たちに式文本来の「言葉を大切にすること、そのためのふさわしい速度があることを教えています。

今は困難の時、あれもできない、これもできない。しかし、困難の中にあつて、様々な面において恵みが散りばめられていることを知らされます。前頁にて、名〇さんが触れている「今や恵みのとき」の御言葉が、語りかけているようです。(佐藤)